



第38 停泊所

2026年8月21日

責任者: 山口 明日波

編集者: 杉野谷 武市

乙幡 雅貴

山口 明日波

第7回東京清掃青年部・横浜清掃ユース部合同学習会開催！

7月19日(日) 東京清掃青年部・横浜清掃ユース部合同学習会を開催しました。東京清掃青年部17支部29名、横浜ユース部は10班1名の仲間が清掃会館に結集しました。今学習会は、初めて学習会が開催されて1年という節目を迎え、当時この学習会を企画し横のつながりを作った高木さん(現:品川区担当中央執行委員)に講演をお願いしました。

講演では、まずこの学習会を企画したきっかけや当時の様子について話されました。きっかけは都市清掃で交流し、「近隣都市である東京と横浜が学習会やったら面白そう」と実現したのがこの学習会です。また「当時は東京・横浜共に採用が少なく、青年層の数が非常に少なかったが、有意義な時間だった」と話されました。また「都市間で繋がることで互いの賃金や職場実態の違いや共通点について話し合い『気づき』や『学び』を得ることができ、自分の職場に持ち帰り実践することで、職場環境の改善に繋がる」と話がありました。講演中は、QRコードを用いて匿名で質問をできる環境を作ったことで、気軽に質問をする仲間や、真剣に耳を傾けメモを取る仲間が多く見受けられました。

交流会では、都市を越えた清掃の仲間同士で仕事の話やプライベートの話で盛り上がりを見せていました。半日という短い時間の中でも東京と横浜の「横のつながり」がより強固なものとなった学習会でした！

あなたの夢はなんですか？

分散会では、賃金や職場実態を共有したことでさまざまな違いに驚く仲間が多くなりました。特勤手当や作業員の人数の違い等、同じ清掃で働く仲間でも「こんなにも違いがあるんだ」という声が上がリ、多くの参加者が「気づき」と「学び」を感じることができた分散会だったのではないのでしょうか？

また、事前アンケートの最後に「あなたの夢はなんですか？」という質問がありました。その中には「結婚したい。家族を安定的に養いたい。家がほしい。老後生活を安定的に暮らしたい」といった声が多く上がりました。ただ、今の青年層はそういったことは現実的に考えられず、夢になってしまっている実態があり、今と昔では、夢の水準が大きく下がっていることが分かりました。賃金を大幅に改善するためには賃金闘争に結集し、組織全体として声を上げていかなければなりません。私たち清掃労働者として、一人ひとりが幸福で安心して生活できる未来を勝ち取るために、これからも青年部活動を主体的に取り組んで行きましょう！





退職者会 VS 青年部



青春をとりもどせ！

退職者会 × 青年部 40年の世代を越えて
「区移管闘争・世代間ギャップ」ってなに？



初の世代間交流、

3時間があつという間

7月12日、清掃会館で東京清掃退職者会と青年部による初めての交流会を開催しました。テーマは『区移管闘争・世代間ギャップ』ってなに？。退職者会と青年部には約40年の年齢差があります。働いてきた時代も、職場環境も、組合活動の形も違います。しかし、その違いを何でも「世代間ギャップ」の一言で片づけてよいのか。区移管闘争、ストライキ、職場民主化、地域との関係、青年部活動を語り合い、予定された3時間があつという間に過ぎました。

「区移管合理化反対」

このスローガンを掲げ、1万人集会、100万署名、ストライキを構える大きな闘争へ。「区移管反対こそ、東京清掃の存在意義だった」という言葉には、組織だけでなく、自分たちの仕事、労働条件、仲間、清掃事業そのものを自分たちの手で守ろうとした労働者の思いがありました。

「区移管反対こそ、

東京清掃の存在意義！」

交流の前半では、東京清掃の歴史を大きく左右した区移管闘争が語られました。当時の職場には、自分たちの仕事や労働条件がどうなるのかという不安に加え、「区に移管されたら、異動先でいじめられるのではないか」という切実な恐怖感もありました。仲間がバラバラにされるのではないのか。清掃事業の一体性は守れるのか。そうした現場の不安や危機も運動の原動力になっていたと語られました。

「余禄は差別の裏返し」

当時の収集は容器収集が主流でした。収集後、住民が空になった容器を取りに集積所へ出てくするため、清掃職員と住民が顔を合わせ、自然と会話が生まれました。「容器収集が地域との繋がりを密にしていた」。この日常的な関係は、区移管反対の署名活動でも大きな力になりました。

一方、ごみや汚物を扱う仕事として清掃労働者が職業差別を受けてきた歴史もあります。交流では「余禄は差別の裏返し」という視点も示されました。地域との温かな関係だけを美化せず、清掃労働が社会からどう見られてきたのか。その両面を知ること、歴史を受け継ぐうえで欠かせません。



組合は、

困った仲間を助ける場所だった

青年部が特に強く感じたのは、当時の組合活動が交渉やストライキだけではなかったことです。週1回の学習会、本の読み合わせ、労働大学、旅行やレクリエーション、家族ぐるみの交流。さらに青年部が腰痛予防体操を職場に持ち込み、早出をなくして時間を守る運動につながる。借金に苦しむ仲間がいれば組合と一緒に解決方法を考え、仲間の家族に不幸があれば葬儀まで手伝う。

「組合員を助けたい。」

仲間だからですよ」

困っている仲間を一人にしない。そんな日常の積み重ねが信頼をつくり、いざという時に一緒に声を上げられる組織をつくっていたということを知りました。



いつの時代だって

「目配り、気配り、思いやり」

退職者会から青年部へ「目配り、気配り、思いやりを持って、組合員の顔を見て声をかけてほしい」と言葉が送られました。今の職場では「昔の若者とは違う」「今の若者は飲みに来ない」と聞くことがあります。一方、青年からすれば、先輩にどう近づけばいいのかわからない。職場で話す機会そのものが少ないという現実もあります。

もちろん40年も違えば価値観や生活様式は違います。しかし、対話不足や組織の課題まで「世代間ギャップ」で片づけられ、そこで思考は止まります。仲間の顔を見る。いつもと違えば声をかける。困っていれば一緒に考える。一人の悩みの背景に職場全体の問題があるなら、みんなの要求として声を上げる。これは現代でもできると思いませんか？

目配り↓気づき

気配り↓対話

思いやり↓助け合い

その積み重ねが、

職場かたがけの運動になる。

昔に戻るんじゃない。

今の「青春」をつくらう。

今回学んだのは「昔の組合は良かった」ということではありません。当時にも封建的な職場、飲酒の強要、職業差別など、変えなければならぬ問題がありました。昔の運動をそのまま復活させる必要はありません。受け継ぎたいのは、仲間と学び、遊び、語り、困った仲間を助け、おかしいことには声を上げ、自分たちの職場を自分たちで良くしていく想いです。

退職者会からは「若い人が世の中を変える。気づいたことは声を上げてほしい」「間違ったことがあってもいい。自分たちで考えたことを、自分たちの思いでやってほしい」と力強い言葉が送られました。世代間ギャップを語る前に、まず話そう。先輩たちがつくってきた運動から学び、今を働く私たち自身が、今の時代に必要な運動をつくるのが急務です。



仲間を見る。声をかける。一緒に考える。

いつの時代だって、そこから労働運動は始まる。

『世代間ギャップ』なんてまやかしさ！



先輩たちのように、

いつまでも笑顔が絶えない人生を過ごすために、

「仲間全員で！ともに頑張りましょう！」